

第3章 和辻哲郎—日本語と哲学の問題 ⑤

前おやさと研究所長
井上 昭夫 Akio Inoue

第5節 神経病者への病のさとしはあり得るか

広松渉の著書における心身の応答的議論においては、からだところの問題を「身体的存在と意識の状態」というテーマをかかかか、まずそれを3つの類型に分け、その基本的関係を哲学的に設定し展開している。その基本的なる3区分とは、第一に、因果関係を認めるもの、第二に、随伴関係と見做すもの、第三に、単なる平衡関係に過ぎないものとみるものである。第一のものは、さらに、(a) 双方向的な因果を認めるものと、(b) 一方的な因果関係しか認めないものとに分かれる。この(b)つまり一方的な因果関係を主張するものは、更に分けると、b1精神の側だけは能動的とみるものと、b2身体の側だけが能動的とみるものから成るとまず規定する。「ところが〈ところ〉には空間的な規定性、場所的な位置性を事の原理上指定できないことがはっきりしている」という理由から、身体は空間的存在、精神は非空間的存在という前提的な了解を立て、心身関係に「因果」「随伴」「平行」といったカテゴリーを適用するのは初歩的なミステイクであり、しかし一方で精神一体が一種の空間的存在だと主張する論者もいる、などなど論題に対する賛否両論の議論を拡散し延々と最後まで類似した解説がつづく。くわえて身体の解剖学的な「物理的」機構と、生化学的な「生理的」機能との相異などをつきつめていくと、心身論は精神病患者の極端な症状も思索の視野の例外ではありえない。というより患者の心の異常性をめぐって正常とは何かという領域にまで心の問題は発展していくのであった。

さて、心身論に関連して天理教には原典「みかぐらうた」(十下り目)に「病の元は心から」という重要な「かしもの・かりもの」に関わる教理が謳われている。病は陽気ぐらしに反する「ほこり」(埃)が積もった「わが身思案」という心遣いの結果であり、親神の人間に対する残念の結果であるから、心の埃を反省・さんげして、心を澄ますことが肝心であると一般に解釈されている。しかし、本席飯降伊蔵が逝去する3日前から「おさづけ」を渡すことになった、上田ナライトの神経病のばあいはどうか。『稿本天理教教祖伝逸話篇』には次のような史実が残っている。

四八 待ってた、待ってた

明治九年十一月九日(陰曆九月二十四日)午後二時頃、上田嘉治郎が、萱生の天神祭に出かけようとした時、機を織っていた娘のナライトが、突然、「布留の石上さんが、総髪のような髪をして、降りて来はる。怖い。」と言うて泣き出した。いろいろと手当てを尽くしたが、何の効能もなかったので、隣の西浦弥平ののをいがけて信心するうち、次第に良くなり、翌月、おぢへ帰って、教祖にお目にかかせて頂いたところ、「待ってた、待ってた。五代前に命のすたるところを救ってくれた叔母やで。」

と、有難いお言葉を頂き、三日の間に、すつきりお救い頂いた。時に、ナライト十四才であった。

神経病とは通常本人の心が正常に機能していないという病であるから、その本人に親神から与えられた心自体が病んでいては、病の元であると教えられる「心の埃」を払う事は不可能である。逸話編を読めば教祖のナライトに対する「病のさとし」はなかったと思われる。こういった教祖の類似霊教談は少なくないが、それは心身論を超えた「魂」のレベルの話であるから、通常哲学の議論の範疇では土俗的な入神現象として議論の外におかれるのが通例である。しかし、心身論を扱う際にもっとも合理的に納得すべき結論を出すのに難解なのが、こういった土俗宗教的なケースを普遍的「心・脳」関係の問題に統合する点である。つまり、「かしもの・かりもの」の教理的解釈においても、脳の機能的な状態と「心」との関係は万人同一だと思込んでいる節があるからで

ある。「心」の構造は、しかし人により、文化・地域の風習によって病が介在しなくとも大いに異なっているのは文化人類学や言語学の研究を俯瞰しても常識であろう。同様に、土俗的なナライトの神経病の「病の元は」、神の心からであったと理解するのは、通常人の病の場合と異質であったとの見方が可能であったかもしれない。しかし、わたくしは例外をみとめず大概の解釈を逆転させ、すべての「病の元は」、精神病や心の働きが関与しないさまざまな先天的疾病もふくめて、例外なく親神の心から発信された「手引き」であると考えようになった。「おふでさき」にも、「何々でも病痛みは更になし 神の急き込み手引きなるそや」(二-7)とあり、また「たんへと筆に知らしてあるけれど 悟り無いのが神の残念」(四-47)と教えられるように、いかなる病であれ「神の手引き」としての中身が何を伝えようとしているのかを関係者が感受し、悟り取ることが信仰者にとってはもっとも大切であり、「病は神の手引きである」との教えの原則にしたがって、病は喜ばしい「贈与」として受けとらねばならないのが、陽気ぐらしを目指す天理教の救済・心身論・「かしもの・かりもの」の教理の核心であると考えているのである。したがって、身体の借り手である「魂の存在」を否定する心身論は、生まれ変わりを前提としない限り「出直しの教理」を否定するので、天理哲学では成立しないということとなる。

以上のような次第で、皮肉にも言おうか、同じように広松渉の『心身問題』のポイントとなる「心-脳」関係の延々とした関連議論も、「社会科学や実践哲学の方面で足元をすくわれなないための予備作業」であり、いわゆる「〈心-身〉問題それ自身は不毛な議論なので、主題的な議論はこれで打ち切りにしたい」(285頁)、という言葉で問題は解消されたという印象を与えて終わっているのであった。論理実証主義者にとっては、提起された質問が、たとえば「父は男であるか」、「神は存在するか」等々は、動詞の意味が話者が問う主語に含まれた意味の質問でそれは同義語反復であり、問題になりえないから答えはないという筋の初歩的な「問題解消」の例がここにおいても見受けられるのは面白いといえる。論理実証主義では、この問題をpseudo-problem(疑似問題)であるということ、学生時代にかずおおく例をあげて論理実証主義者のドイツのファイグル教授から叩きこまれたことを思いだした次第である。回答不可能な不毛であると証明される議論、つまり、問題に値しないから答えは最初から存在しない議論を、答えを探索して延々と続けるのはまったく無意味であるというのが論理実証主義の基本的出発点となっていたのであった。

天理心身問題に関連する論考としては、拙著『中山みき「元の理」を読み解く』(日本地域社会研究所、2007年)所収の第四章「元の理」の応用天理教学—第六節「身代わり」の思想と脳死・臓器移植」を参照いただければありがたい。拙論の初出は『脳死・臓器移植を考える—天理教者の諸見解』(教養ブックス⑩、天理やまと文化会議編、1999年)であり、1998年教祖御誕生200年記念フォーラム『生命・女性・環境』の一つ「生命倫理：臓器移植・その現状と教理からの解釈」で発表したものである。この記念フォーラムの著名な教内外識者の発表論考の中で、金子昭氏がまとめた「陽気ぐらしの人間の医療を求めて—脳死・臓器移植の教理的解釈から見えてくる諸問題」の「五、脳死・臓器移植をめぐる二律背反」において指摘した、同一の教理からする二律背反の正・反命題を止揚する合命題要請の議論は、はや20年近くを経た現在でも教理的に成熟していない。氏は正反を止揚すべき教理として、かしもの・かりもの、いんねん、ひのきしん、出直しの天理教独自の4つの教えをとりあげ、簡潔な解説のなかにきわめて重要な問題を提起している。